

## 第二章

### 青春の情熱

故郷・長崎で教師となり、そして、暁星学園の青年校長に



## アイスクリームで生徒の心を開かせる

1955年(昭和30年)10月帰国。当時の日本は、自由党と民主党が合同して自由民主党が結成され、神武景氣が始まった頃でした。翌年には「もはや戦後ではない」という言葉が流行。ソニーのトランジスタラジオが発売され、街頭テレビに人々が集まっていました。一般家庭では、まだ高嶺の花だった白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫が、3種の神器と言われていた時代でした。戦後の混乱が収まり、貧しいながらも活気が出てきた頃だったのです。

自身は渡欧前も帰国後も修道院の生活ですから、5年たっても何も変わつたことはありません。ただ、一般の人々の暮らしが少し豊かになったという感じは受けました。

帰国すると、すぐ、長崎海星学園の高校の教師の辞令が出て、長崎へ向かいました。海星学園は、長崎港を一望できる山手にあり、教室からも校庭からも、キラキラと輝く海を見ることができました。学校では、毎週20時間、宗教や倫理の授業を担当することに。最初に教室で生徒を見て思ったのは、この生徒たち全員を改心させてやろう、ということ(笑)。29歳で初めて教壇に立つたわけですから、情熱に燃えて熱心に教えめました。熱血教師ですよ(笑)。宗教の時間には、賛美歌をプリントした手作りの歌集を配って歌ったりしました。授業の準備のために、一生懸命ノート作りもしました。

生徒を改心させる、という野心があつたから、放課後も毎日指導しました。生徒を呼んで、宗教の話をして、お茶を飲ませてあげたり、切手をあげたり。土曜日は午後から生徒たちと一緒に遊んで、日曜日でもミサに呼んで、その後野球をしたり散歩をしました。

長崎は殉教の歴史がある土地だから、キリスト教は耶穌教、邪宗門、悪い宗教という考えが人々に染み込ん

でいました。大都市だから、付き合いも狭いでしょう。生徒が洗礼を受けたいと言っても、親が大反対するような土地であり、時代でした。それが、また、若い私の闘争心をかきたて、キリストの弟子になつたつもりで、みんなを回心させる、と本気で思っていました。

生徒の心をつかむために、いろいろな工夫をしました。例えば、スイスでの夏休みを参考にしたコロニー・ド・バカンスを、雲仙や五島列島、鹿児島海岸などでやりました。夏休みの2、3週間、希望者を山や海に連れて行って合宿。自然の中でキャンプして、一緒に楽しく遊んで、時々、宗教のお話をして(笑)。

地方から来ている生徒たちは喜びました。お金が出せない生徒はタダ。夏休みに、私が教会に行つてお説教するとお礼が出るので、許可をいただいてそのお金を生徒たちのために使つたんです。当時のことから、海水浴に行くにしても海水パンツを持っていない生徒がいるから、デパートに行つていろいろな大きさの海水パンツを買つて来て、好きなものを選ばせました。生徒たちは「うあ、よかった」「泳ぎにいい」「うれしか」と言いながら、海水パンツに飛びついていました。

人の心をつかむためには、いろいろお金が必要になつてくるんです(笑)。まじめな話ばかりをしていても、聞いてくれないでしょう。友達付き合いだつて、お茶を飲んだり食事をしたりするじゃないですか。だから、生徒と一緒にお茶を飲んだり、食事したり、遊んだりしました。

私は後に東京の暁星学園で校長になつてからも、修学旅行に行つた時などは教師に出る手当てで、生徒たちにお菓子を買つたりしました。それは、たかが1個100円のアイスクリームのことなんですけれど、いまだに「先生がアイスクリームを買ってくれて、うれしかった」という人がいます。

人間の心つて不思議なもので、どうしても相性の悪い人間はいるもの。先生と生徒もそうです。見ただけで「目つき悪いな」とか思つて、できれば話なんかしたくないというのが本心。でも、それでは生徒の心をつか

むことができないから、「ちょっと、おいで」と言うと、向こうも嫌がつて「何ですか」とか突つ張つてくる。「何でもないけど、私のアイスクリーム食べない？」つてあげる。そんなことで、心がスパッと変わることもあるんです。人間の心つて、非常に複雑でかつシンプル。そういう体験をして、考えてみると1個100円のアイスクリーム代はずいぶん安い教育費だなと(笑)。宗教に興味を持たせる改心だけではなく、悪いことをした生徒の心を変えさせる改心のためにも、時々この手を有効に使うようにしました(笑)。

長崎の海星高校時代に話を戻すと、夏休みはコロニーをやつて、冬になるとクリスマスパーティーをやりました。私のお金がなくなると、アメリカの友人の神父に「少しお金をくれないか」と手紙を書いて、ドルを送金してもらいました。

私がそんなことができたのも、神父だからではないでしょうか。お給料をいただいても、何も使うことはありません。家庭を持つている教師に同じことをやれと言つても無理でしょう。自分の妻子を養わなければいけませんから。私は自分の時間もお金も、すべてを信仰と教育のために使つていました。

海星高校にいた5年間、1年間で5人くらいずつ全部で20人ほどに洗礼を授けました。

## 帰国教師の悩み

5年間、スイスのフリップル大学で欧米人と生活して、彼らのオープンな気風に馴染んでいました。今でも海外で暮らしていた帰国子女と話をすると面白いですよ。私に対しても平気でどんどん話しかけてくるし、彼

らの話も聞いていて楽しいし、面白いんです。

ところが、日本で育つた日本人の場合は、こちらから話しかけても返事をしてくれずかどうかもわからないでしょう。向こうも緊張しているのかもしれないけれど、その緊張をいちいち解きほぐしていたら面倒くさい(笑)。だから、海星学園に赴任して、最初の頃はスイスにいた時と同じようにフランクに生徒に接していたんです。そうしたら、評判が悪くてね(笑)。

日本では、三歩下がつて師の影を踏まず、のような考え方が残つていて、教師は威厳を持つた存在でなければいけないということになっている(笑)。私は授業は権威をもってキチンと行うけれど、休憩時間は生徒と一緒に遊ぶという方針でした。ところが、他の教師からは授業まで遊んでるように受け取られたり、生徒の人気取りをしているように見えたらしいんです。私の物の言い方ややり方が、洋行帰りのキザとも映つていたようです。

しかし、私は生徒たちに人気のない宗教や倫理という課目を教えなければいけません。「宗教は受験科目ではないから、勉強しても無駄」「金儲けに関係ない」と、生徒たちは宗教の授業を軽視しがちでした。少しでも生徒が興味を惹くような工夫をしなければいけなかったのです。だから、人気取りでも、いいじゃないかと内心思っていました。

暁星学園に行つてからのことですが、小学校6年生に宗教を教えていて、その時、生徒たちが「宗教は面白い」つて言うんですよ。それを聞いて、他の先生が「宗教が面白いはずじゃないか」つて不思議がつていました(笑)。その頃の生徒の1人に、今、芸能界で活躍しているピージーフォーのモト冬樹がいたんです。彼が木更津の暁星国際学園に講演に来てくれたことがあつて、私の宗教の授業をよく覚えていると言つて、その内容を話すんです。生徒つて、無駄な話をよく覚えていられるもんだなつて(笑)。

余談ですが、私はピージョーフォ어의モト冬樹と聞いても、あまりテレビを見ませんから、よく知らなかったんです。でも、顔を見たら思い出しました。何度か校長室に呼び出したことがあるんです。だから、覚えていました。ああ、あの生徒だって(笑)。でも、芸能界で成功していると知って、〝良かったな、と本当にうれしくなりました。

## 暁星学園史上最年少の校長に

長崎の海星学園には5年間在籍、4年目からは副校長をしていました。最初から海星学園には5年間と決められていたので、その間は教師として、とにかく一生懸命やりました。5年たったところで、今度は東京の暁星学園の小学校・中学校・高校の校長になれという辞令が届きました。安保闘争や三井三池争議など、騒然とした世情の1960年(昭和35年)のことです。

1960年9月に九段の母校に校長として赴任。35歳の校長は暁星学園始まって以来ということでした。長崎では一介の教師として、生徒を直接指導してきたわけですが、今度は校長として教職員が100人近くいる学校の管理者になったわけです。始業式とか行事などのやるべきことはわかっていましたが、校長としてなすべき仕事はどんなことなのか、よくわからないままに赴任したというのが正直なところでした。

本人がそうなのですから、学校の年配の職員や先輩教師たち、それから生徒の父兄も、〝こんな若造にできるのだろうか?と不安だったでしょう(笑)。

特に、私が暁星学園の中学校で教わった先生が7、8人は残っていました。その先生たちにとつては、教えずが上司になるんですから、面白いはずがありませんよね。〝何でアイツが校長なんだと。こつちも中学時代につまらない授業を受けて、テストで点数つけられた先生がいて、成績が良くなかったから気分悪い(笑)。陰でイヤミを言っていた先生もいたみたいですよ、私の成績を見ようかなんてね。残っているとは思わなかったけれど、本当に発表されたら大変だった(笑)。でも、私は神父に叙階されていたのですから、私が校長になるのは仕方ないことと諦めたようです。国家公務員でも上級と中級は試験が違うでしょう。上級国家公務員が20代で税務署長や警察署長になると、似た感じかもしれません。

校長になったばかりの2学期の小学校の父兄会に、暁星中学の時の同級生がいて、お互いにビックリしましたね。〝まさか、アイツじゃないだろうな、って(笑)。

でも、周囲の雑音に対して私自身は比較的平静でした。〝経験がないんだから、一生懸命やるだけだ」と。考えてみたら、学校運営はそんなに複雑なことじゃないですよ。どうやって生徒の個性を伸ばし、学校を良くしていくか——校長としてやるべきことは、この1点に尽きるわけです。

とは言っても、私への非難や中傷がこたえた時もありますし、気分が落ち込むこともありましたが。そんな時はお祈りをしました。神様の前で頭を垂れて、自分に過ちがあったり足りないところがあれば、あるいは人の心を傷付けることがあったなら神様に告白する。そして、相手にも直接お詫びをする。どうしていいかわからない時は黙祷する。宗教家が悩みや心配ごとを解決するには、祈りしかないのです。お酒を飲んだり、カラオケで歌ってウサを晴らすわけにはいきませんから(笑)。それから、心配ごとがあっても私はぐっすり眠れるんです。眠れない人はまいっちゃうでしょうけど。

## 毎朝、校舎の玄関に立つて生徒に声をかけた

長崎にいた時と違って、生徒に直接教える授業はごくわずかしかなかった。けれども、できるだけ生徒を知るといのは校長として大事なことです。小学校、中学校、高校と合わせて2000人近くの生徒がいます。毎朝、校舎の玄関に立つて登校してくる生徒に声をかけたり、昼休みや放課後も時間の許すかぎり、生徒たちと話をするようにしました。教育者として生徒と出会って、どれくらい良い影響を与えることができるかが勝負だと思っていましたから、そういう点では努力しました。

教師と生徒も、人間と人間の出会い。毎日、心を込めた挨拶をするだけで、やっぱり違うと思うんです。生徒の名前をできるだけ覚えるようにして、「〇〇君、おはよう」「〇〇君、元気？」とかね。そうすると、小学生でも「校長先生、僕のこと覚えてるの」って驚きながら喜ぶんです。もちろん、名前と顔が一致しない生徒もいますよ。そんな時は「覚えておけば良かった」と思いながら、ウーッと口ごもりながら「元気にやっている？」って（笑）。昼休みや放課後も教室に入行って行って、生徒と話しました。

生徒たちの家庭の状況というのも、当然、頭に入れていきます。昔、ある中学生のお父様が亡くなられた時、寂しい気持ちに打ち克って登校して来たんだらうと、「〇〇君、元気か？ お母さんは大丈夫？」と何回か声をかけたんです。私は教育者として当然のことだし、そんなことは忘れていたんですが、彼は今でも感銘を受けたと言ってくれます。それから、彼は朝早く学校に来て勉強するようになって、現役で東大に合格しました。

## 心に残る問題児たち

優秀な生徒も覚えていますが、より心に残るのは「問題児」と呼ばれる生徒です。例えば、長崎の海星学園を退学になった生徒を暁星学園に編入させたことがあります。万引きなどの盗みはしないけれど、ケンカをしてヤクザの世界に憧れているような生徒でした。ちょうど私の母親の葬式の時に紹介されて初めて会ったんですが、「ケンカも強そうじゃないか」と声をかけたら、うれしそうに顔をしていました。母親と上京して来て、部屋を借りて暁星に通って来ました。最初に「ケンカをしたら、即刻、退学だ」と宣言してあったのですが、何度か他校の生徒とケンカをしたんです。校長室に呼び出して聞いてみると、彼の友達である暁星の生徒が他校の生徒にたかられているのを見過ごすことができなかったんですね。だから、退学にはなりませんでした。

その生徒に関しては、こんなこともありました。暁星に編入して初めての中間試験の時に、仲良くなった友達3人で集まって試験勉強しようと、彼の部屋に泊まり込んだらしい。ところが、勉強した後で話に夢中になって寝るのが遅くなって寝坊してしまいました。もう試験には間に合わないし、学校に行くと思われそうに頭冷やして温泉に行こうと考えたらいいんです。でも、黙って行ったら、もつと怒られるという事はわかっていたみたいで、上野駅から電話してくるんですよ。

「寝坊して、試験に間に合わない。反省するために出かけます」

「どこ行くんだ？」

「水上温泉にでも行くか」と

「馬鹿モン！ そこから一歩でも動いたら退学だ！」

事務職員に車で迎えに行かせて、宿直室で寝させました。お昼頃に食事を持って行って、食べさせて、「食

べる物を食べて、明日から頑張れ」と言いました。

この生徒に限らず、校長室に呼び出して話をしたりすると、どうしても記憶に残ります。そんな生徒が、後年、会社の社長になったり、面白い仕事をしていたりするんですね。つくづく、学校の勉強がすべてではないと思います。

## 生徒の良き牧者でありたい

どんな学校でも2000人もの生徒がいれば、問題を起こす生徒はいるもの。そういう子供を改心させることこそが、教育の本質だと思います。

バイブルには「良き牧者」のことが書かれています。1頭の傷ついた羊を肩に担いで運び、傷の治療をして健康を取り戻させるという話です。キリスト様は「1頭も失わない」良き牧者でした。教育者は、すべからず良き牧者でなければいけないのではないのでしょうか。

ですから、極力過ちを犯した生徒への退学などの罰は慎重にあるべきと、私は思っています。罰を与える前に、もう一度チャンスを与えたい。犯罪を犯したわけではないのですから、改心すれば良いんです。改心した生徒が卒業して、社会人となり、立派な人間となって周囲に良い影響を与える。改心した生徒が世の中で、地の塩、世の光 となってくれば、教育者として最大の喜びですし、そういう心で教育しなければいけないと思うのです。

私はよく教師に話をするのですが、生徒が過ちを犯したとして、生徒が罪人で教師が善人ということはありません。神様の目から見て、過ちを犯した生徒と罰を与えようとしている教師のどちらに価値があるのか。私は、まだ純な気持ちを持っている生徒のほうが存在価値があると思います。教師が生徒を罰する時には、そういう気持ちで行わなければいけないのではないのでしょうか。

教師と生徒、親と子といえども、神様の前では同じように価値ある存在。生徒に接する時には、生徒の心を見なければいけません。旧約のバイブルには「人間は神様に似せて作られた存在である」と書かれています。私も人間、生徒も人間。そうすると、生徒にも神様の跡があるということ。生徒の心は神様の絵。生徒が神様の絵であるとするならば、生徒に暴言を吐くとか体罰を与えるとかはできません。

私は、教師がそういう気持ちで接すれば、生徒の心が動くという信念を持っています。

誰の言うことも聞かない、悪いことはかりをしている生徒がいます。校長室に呼んでも、生徒はすぐには話しませんよ。心を開かないから。最初はお茶を出しても、飲むともしない。「お茶ぐらい付き合っただけじゃなく」と言うと、イヤイヤお茶を飲む。お茶を飲んだところで、「今週の〇曜日にまた会おう。怒るためだと生徒は食べます。3回目になると、「コイツは僕の敵ではない、意地悪じゃない」と子供なりに気付くんです。たいがい3回目には話を始めます。だんだん心を開いてくるんですね。

生徒が過ちを犯したとしても、どういう心で過ちを犯したかが大事なんです。例えば、いつも遅刻してくる生徒がいたので聞いてみたことがあります。

「僕、どうしたの？ 朝御飯は食べてきた？」

「テーブルの上にパンが置いてあったから、それを食べてきました」「お母さんやお父さんは起きてくれない

の？」

「2人とも寝ていました」

そんな家庭の事情を聞いてしまうと、遅れてくる生徒のことを怒れなくなるじゃないですか。話を聞いてみれば、生徒が悪いのではなく家庭に問題があることがわかるのです。

それでも、校長として生徒に罰を与えなければいけないこともあるのです。生徒も両親も下を向いて、中には上下座をされる両親もいます。一度、「簡単に退学とか言っているけど、オレの気持ちがわかるのかよ。おまえ、神父なのに平気なのかよ」と言われたことがあります。もちろん私も、小学校からこの学校に通っていた生徒が高校で辞めなければいけなくなつて、今日はどんな気持ちで校門を潜って出ていくのだろうかと思うと、いたたまれない気分になつていきます。ですから、罰を受けるようなことをしたのは生徒に責任がありますが、親にも、教師にも、校長にも責任があり、そのうえで悲しい罰を与えなければいけないことをお話しするようになっていきます。

退学にした生徒のその後は、私のできる限りの面倒を見るようにしています。そういうことをするための神父の身なのですから。

## 生徒の母親、父親に望むこと

学費を払い、物を買って与えて、親の義務を果たしたと思つている両親が多いのではないのでしょうか。子供の心はお金では解決できません。子供の心を動かすのは、両親の愛情です。問題を起こした生徒でも、母親が嘆き悲しんで泣いているのを見ると「悪い人間にはなれない」と言います。私も前に述べたように、たくさんの子供を育てながら農作業や家事に夜遅くまで働く母親の姿を見て、幼心に「マジメにやらないと、母親がかわいそうだが」と心を動かされました。せめてわが子のために朝起きて朝食を一緒に食べるぐらいのことはしてあげてほしいのです。

そして、ぜひ、子供と話をする時間を取っていただきたい。親も教師も忙しくて子供の話を聞いてやれないのでは、子供がかわいそうです。

総務庁が日本、アメリカ、韓国の3カ国で実施した「子どもと家庭に関する国際比較調査」（子ども白書「1996年版」）によると、日本はアメリカや韓国に比べて、親子の接触時間の少なさが目立ちます。例えば、平日に子供と接する時間は「1時間くらい」と答えた親が最多で22%。韓国も「1時間くらい」が1位ですが20%です。そして、日本ではこの接触時間で「十分だ」とする親が51%もいるのに、韓国では逆に「不足」と感じる親が半数を超えています。ちなみにアメリカでは、「6〜10時間」と答えた親が20%で1位でした。接触時間が「ほとんどない」と答えた親の割合も、日本は11%、韓国は6%、アメリカは1%でした。いかに、日本の親が子供と接触していないかがおわかりいただけたと思います。

また、総務庁青少年対策本部の「少年の生活意識と実態に関する世論調査」（1988年）を見ると、お母さんと話さないのは「お母さんが忙しそうだから」という答えが、女の子では47・7%も占めています。仕事



を持つているお母さんが増え、家にいる時間は超特急で家事をしなければいけないのでしょう。子供はそんなお母さんを見て、話しかけるのをためらっているのです。

こんな調査を見るにつけ、校長でも、教師でも、親でも、時間を取って、子供と話ができる状態にしなければいけないと思います。

私はユダヤの教育を勉強しましたが、ユダヤの家庭では毎週土曜日に家族揃ってお祈りをして、賛美歌を歌って、ワインを飲みながら、ゆつくり2、3時間かけて夕食を摂ります。食事をしながら、子供たちに1週間のできごとを聞くんです。もちろん、テレビやラジオは消しています。素晴らしいでしょう。

また、よく指摘がなされていますが、「父親不在」の悪影響についても考えてみなければいけません。父親がビジョンを示し、母親が子供の心と体の健康をみるという役割分担が理想的なのではないでしょうか。ところが今の日本の家庭では、父親は土日もゴルフで不在か、ビールを飲んでテレビを見ているか。これでは、子供も父親を尊敬できないのではないのでしょうか。ユダヤ人の父親は、タルムード（教典）やトーラ（旧約聖書）を勉強して、自分の子供が3歳になった時から教え始めます。自ら学んで教える——この姿勢を現代の日本の父親は学ぶべきなのではないでしょうか。今の父親は子供に何も教えず、話すこともしていないように見えます。実際、1994年の「国際家族年」に文部省が行った日本、韓国、タイ、アメリカ、イギリス、スウェーデンの6カ国を対象にした調査では、日本の父親が平日に子供といる時間（子供の見えるところにいる、子供と一緒に寝るなども含めて）は、3・32時間で最少でした。そして、一緒にいる時にやっていることも、「仕事を教える」が11・1%（アメリカでは42・3%）、「スポーツを教える」が38・1%（アメリカでは55・3%）「趣味を教える」が17・3%（アメリカでは39%）と、教えることをしていません。アメリカの父親よりも多くやっていることは、74・6%（アメリカは68・1%）の「テレビを見る」ことぐらいです。

今の日本の家族は形骸化しています。家族はいるけれど、物体としているだけで、「心の家族」ではない家庭が多くなっているのです。さらに、離婚家庭も増える一方です。1993年の統計では離婚は年間18万8297件。5組に1組は離婚している計算になるとか。子供たちは愛情に飢え、親身になって話を聞いてくれ、自分たちの心の痛みを知ってくれる人が周囲にいないので、非行に走ってしまうのです。

「王国を統治するよりも、家庭を治めることのほうが難しい」と言ったのは、フランスの哲学者モンテーユです。今ほど父権を確立して、平和な家庭の維持に努めることが望まれている時代はないでしょう。

## 人間的魅力のある教師でなければ

私は学校も1つの大きな家族だと思っています。校長や教師がいて、生徒も上級生から下級生までいる。教師は父親や母親のような気持ちで生徒に接して、生徒を理解するように努力しなければいけません。

その時に問われるのは、教師の質だと思います。教師は人間として生徒を惹き付けられる、生徒を魅了できる者でなければいけない、というのが私の主張です。教師は言葉遣いにしても、態度にしても、身だしなみにしても、キチンとしていて立派でなければいけません。

生徒が「この先生はイヤ、話したくない、近づきたくない」と思ってしまうようではダメ。子供が「話をしたい」「悩みを訴えたい」と思う信頼関係を築くことが一番重要なんです。

教師は羊を牧する牧者なので、羊である生徒を知らなければ仕事になりません。生徒の家庭環境、健



康状態、現在の悩みなどを把握するために、必死の思いで生徒に接してほしいのです。ただ教室に行つて授業をして終わりなら、生徒を知るチャンスはないでしょう。生徒を知るには、時間を犠牲にしなければなりません。放課後でも「君のためには何時間でもさくから、おいで」と言える覚悟が必要です。彼がどうして勉強ができないのか、どうして勉強に興味がないのか、どうして落ち着かないのか、どうして過ちを犯すのか、を知らなければいけません。そして、悩みがあれば解決してあげ、苦しみがあれば分かち合つてあげる。そのためには何時間かかってもいいよ、と言つてあげる姿勢が大事なんです。生徒の心を開かせるのが教育の基本、勉強はその次です。

親も自分の子供が良い中学、良い高校、良い大学に入ることを期待しがちです。受験勉強に出遅れてはいけないという焦りもあるでしょう。でも、良い学校に進学することがすべてではありません。仮に東大に合格したとしても、オウム真理教のような集団に入ってしまったら、すべてが終わりになってしまふのではないのでしょうか。そうならないための教育というのは範囲も広く、地道に行わなければいけないことが、たくさんあるのです。教育とは立派な人間をつくること。完全な人間を目指すのですが、完全な人間はいません。できるだけ完全なものに近づくように努力するのが教育なんです。旧約のバイブルには、人生は闘いだと言われています。より完全なものへ、より良きものに向かって、常に努力して、闘い続けること。その努力を続けるかどうかで、どんなレベルで人生が終わるかが違つてくるのです。そのことを子供たちに教えることが、教師にとつても、親にとつても、一番重要なのではないのでしょうか。

## 文武両道が理想

スポーツが学校教育に果たす役割には大きいものがあります。身体を鍛え、体力をつけると共に、困難や障害に遭つてもくじけない精神力を培うなど、スポーツによつて得られる長所はたくさんあります。そして、学校として何か一つ強いスポーツがあれば、応援などで全校生徒の心が1つになるでしょう。その過程が素晴らしいと思うんです。それに、わが校の存在を世間に知つてもらえる、という付随した効果もあります。

長崎の海星学園は野球が強かつたんです。何回か甲子園にも出場してました。私自身も小さい頃から野球が好きで、兄に中学校の甲子園の予選大会なんかに連れて行つてもらつてました。だから、海星学園の野球部の練習場にも足を運びました。スイカを差し入れしたりね。試合には毎回、生徒を連れて応援に行きました。当時の野球部の生徒の中には、後にプロ野球選手になつた生徒もいましたよ。大洋（現在の横浜）に入団した峰投手やロッテや阪神で活躍した池辺選手がいたんです。

海星学園で校長になつてからは、サッカーを強くしたいと考えました。グラウンドの関係で野球は無理、テニスも強くない。サッカー部は、1910年から海星学園にあり、1926年には甲子園に出場という歴史をもっています。いわば、海星学園の校技です。しかし、私が赴任した当時は強くはありませんでした。

ある時、海星の卒業生で早稲田大学に進学した生徒が、体育の教師に雇つてくれと言つてきました。私は「体育の教師は間に合つているからいらぬ」と断つたんですが、他の先生方が「いい青年だし、サッカーもうまいから、ぜひ、採用してくれ」と言うわけ。だから、「海星学園の高校のサッカー部を、全国大会に出場できるように強くするなら雇う」と条件を付けました。そうしたら、彼は「出す」と言つたんで、体育の教師に来てもらいました。それが、今もサッカー部の監督を務める林先生なんです。

彼が監督になってから6、7年目で全国大会に出場、今まで10回以上出ています。彼は監督としてヨーロッパに行つて優勝して、テレビにも出演して有名になりましたよ。暁星の生徒たちも「林監督」と言つて尊敬しています。彼が教壇に立つと、教室がシーンとなるとか。今でも時々会うと褒めますよ、「私との約束をちゃんと守つたな」つて(笑)。

木更津の暁星国際学園では、野球部が強くて、秋の大会では千葉県で優勝したことも。これで甲子園に行けると思つたんですがダメでした。何回かチャンスがあつて、もう1回勝てば行けるところまでいったんですけど……。一度甲子園に出て、1回勝つて、試合後に校旗を見上げながら校歌を歌つてみたいなど、本当にそう思いますね。

理想は文武両道ですが、なかなか現実には難しいもの。生徒には精一杯がんばってもらいたいですね。

## 実は、私プロレスの味方です

私自身もスポーツは好きですよ。修道院の生活では、毎日1時間スポーツの時間があるんです。春は野球、夏はテニス、冬はサッカーやバスケット。雨の時は卓球。だから、小学校を卒業してから30歳になるまで、毎日、何かスポーツをしていたんです。余談ですが、私たちの時代の修道院では男同士で体に触れてはいけないという中世以来の教育を受け継がれていました。だから、柔道はダメで剣道はOK。相撲もダメでした。

スポーツは見るのも好きですね。校長なんてストレスの多い仕事だから、格闘技がいいんですよ。ラグビー

やボクシング、プロレスなんかがいい。見ていてスカッとするじゃないですか。

プロレスは、長崎の海星学園に赴任した時に生まれて初めて見ました。真剣勝負だと思つて見ていましたから、スゴいな、面白くなって。やられても、やられても、死なない。大技、小技を華麗に決められても死なない。人間つて神秘的な力があるんだと哲学的に感心していったんです(笑)。

当時は、力道山がキングコングを破つて世界チャンピオンになった頃で、非常にエキサイティングでした。必殺の空手チョップとか興奮しました。それから、ジャイアント馬場が出てきたり、東郷がいたり。

プロレスを好きな生徒がいて、一度、一緒に見に行つたことがあります。椅子を投げつけているから、飛んできたら危ないんじゃないかと心配しながら見ていました。手が折れたように見せて、またやつつけに行つたり。それで、これはウソなのかな、と思い始めました。だって、椅子は観客には絶対飛んでこないしね(笑)。

それでも、面白くて、面白くて、テレビでよく見ました。「そこだ、やれー」なんて言いながらね。ところが、プロレス中継は夜8時頃から。海星学園の校長室にあつたテレビで見ていたんですが、8時45分からチャペルで夕べのお祈りがあるんです。だから、最後まで見ていられない。学校からチャペルまでは、坂道や階段を登つて行かなければいけないんです。でも、できるだけプロレスを見ていたいから、ぎりぎりまで見て、後はダッシュ。何十段もある階段をハアハア言いながら駆け登つて。神父がお祈りの時間に遅刻するのはカッコ悪いから、私も必死です。扉を開ける時は、走つて来たなんて悟られないように、涼しい顔をして入つて行きました(笑)。

今でもプロレスは見ていますよ。ただ、昔みたいに人気がないから、決まった時間に放映しないでしょう。不定期だから、見逃すこともあつて残念です。

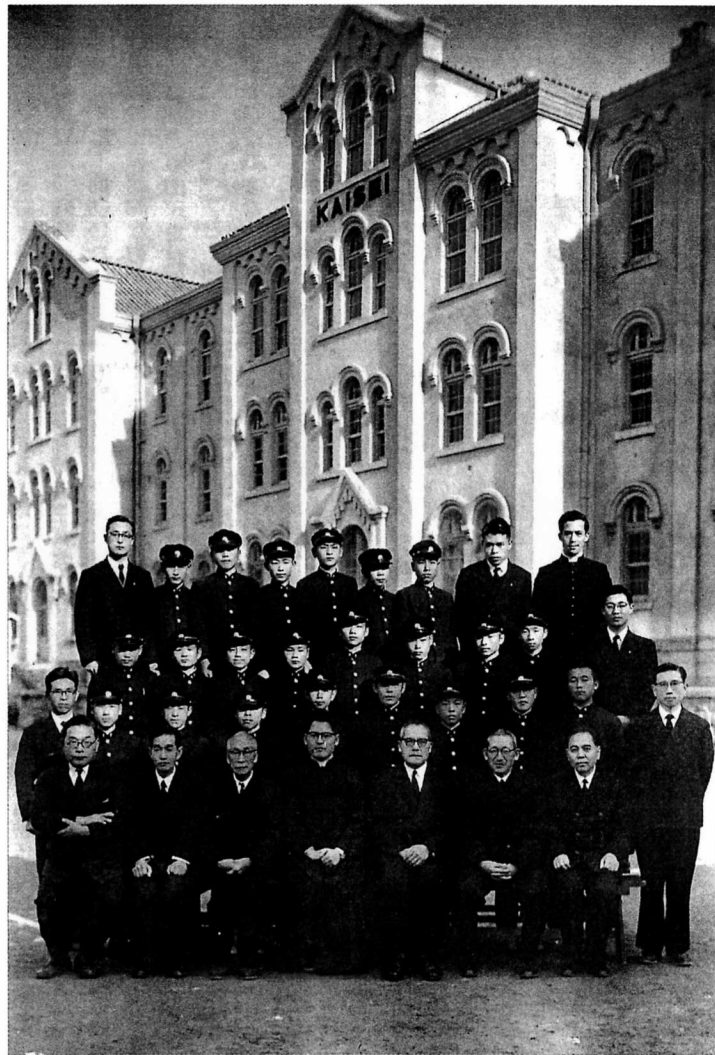
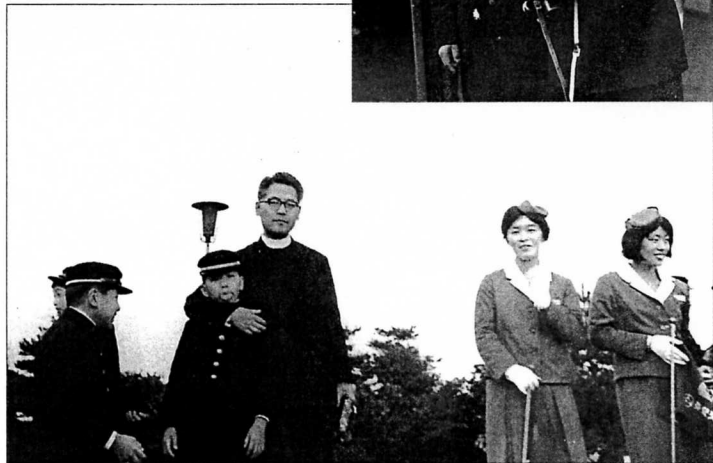


生徒と合宿生活での屋外ミサ

恩師とともに



修学旅行先で



長崎・海星学園の副校長時代

